

みめぐみの

第17部



みめぐみの

第17部



大谷光道著

目次

自己診断

どんな心持ち?

おさらい 4

口ではお念佛

5

専修と雑修

8 7 5

千中無一

11 12 11

ひよつとしたら、格好だけ?

14 12 11

そんなにいけないのか

14

もつと、もつと

17 18 17

後世を祈る

14

現世の存在

18

方便

21

仏様のはたらき

22

読者の貢

24

あとがき

27

26

むすび

21

22

21

18

17

14

12

11

8

7

5

31 27 26 24 22 21 18 17 14 12 11 8 7 5 2

自己診断

暑さも峠を越したと聞きますが、暑い日が続きます。地球温暖化といいますが、どこまで暑くなるのでしょうか。

今日の本題に入る前に、頭のすみっこにこんなことを留めておいて下さい。

最近「タラレバ」という言葉があります。「○○さえうまくいっててくれたら、××するのになあ。」、「……れば、……」の類で、自分自身のやるべきことをやらずに、物事がうまくいった後にことに想像を膨らませて、ほくそ



笑えんでいることをいいますね。『待ちぼうけ』の歌のウサギの話を思い出します。

ある日、畠仕事をしていたら、ウサギが勝手に飛び出して木の切り株にぶつかって転がつてくれたので、捕まえる手間が要らなかつた。これに味を占めて、毎日仕事もせずに朝から晩までウサギの飛び出すのを待つてばかりいた農夫の話。

また、こんな昔話がありました。あるところに貧乏な夫婦が住んでいた。ある時神様に、「困つたことがあればこれを振るがいい。何でも思いが叶うから。」と打ち出の小槌こづちをいただく。夫婦がいろんな困難に直面して、「これを振ろう。」とどちらかが言うと、「やめておこう。働けば叶うことだから。」と、とうとうその小槌を振らずにすませてしまつたというお話。

前者は本来自分のやるべき事をやらない、つまり「怠けている」姿で、後者は「それは、自分でやれば出来ることじゃないのか。」と励む話です。

どんな心持ち？

ご自分の家の宗旨を思い出そうとすると、何を称えるかをまず考える方が時々ありますね。「うちは南無妙法蓮華経だから、あー、日蓮宗か。」「南無大師遍照金剛は……真言宗でしたかね。」「南無阿弥陀仏……浄土宗、淨土真宗かな。どつちやつたか、お恥ずかしいことで……。」などとね。

「なんだ、私なんか浄土真宗って、はつきりしている。」とおっしゃるかもしれません。

そこでお聞きしたいのですが、「皆さんお念佛を称えるときに、どんな心持ちで称えておられますか。」これが今日の課題です。

私たちがお念佛を称えるときの動機や心持ち、思いなどを明らかにしてみることは、そのまま自分の信仰のあり方を探る上で、大いに意味があることです。

「どんな心持ちで称えておられますか。」と不意に尋ねられると、一瞬ギクツとして、「御恩報謝の気持ちでお念仏を称えている。」というお答えになると、いうところでしょう。

さらに「何か願い事が心に涌いてきませんか。」とお尋ねすると、「とんでもない。それなら現世利益じゃないか。」とお叱りを受け、「私は家で、そしてお寺へ行つてナンマンダブツを称えているし、他所の神仏のところへ願い事などしに行つたことはない。浄土真宗は報謝のお念仏と聞かされているし、毎朝毎晩、仏壇にお参りしている。」と畳みかけられるでしょうね。

おさらい

浄土真宗の「現世利益」については時々お話ししていますが、「どうだつたかな。」という方のために、ここでまず思い出して整理しておきましょう。現世利益というのは、いわゆる現世利益というのは、わかりやすいのはお

金儲けがしたいとか、病気を治してほしいとか、入学試験に合格させてほしいとか、あるいは安産を祈るとか、よく言われる「家内安全・商売繁盛」の類ですね。つまり、ご利益目当てに神仏にお願いすること、ご祈禱(きとう)することです。もつと露骨に、わかりやすく言えば、「神仏の力を利用して、自分の欲望を満たそうとすること」ですね。その欲の内容も自分だけの、目の前の、即物的な利益で、「りやく」というより「りえき」と呼んだほうがぴったり来る内容ですね。



京都市立芸術大学のスティーブン・ネルソン助教授に
声明に関する深い雅楽の指導を受ける（大谷声明研修会にて）

これに対して浄土真宗の現世利益は、信心の結果いただくご利益で、阿弥陀様の本願力によるものです。私たちを根底から支える力であり、私たちの生きる力であり、私たちの前方を見せる光明であり、やるべきことをやる勇気です。言い換えれば「心のご利益」ですね。

口ではお念佛

まず、次のご和讃を拝読してみましょう。

仏号ぶつごう むねと修しゅすれども

現世げんせいをいのる行者ぎょうしゃをば

口では念佛を称えているのだけれども

これも雑修ざっしゅとなづけてぞ

これもやはり雑修と名づける。この人たちは

千中無一せんじゅういちときらはるゝ

千人の中でも一人も往生できないので、専修の人とわけへだてされるのである。

仏号：南無阿弥陀仏を称える

千中無一：千人の中でも一人も往生できない

雑修：念佛以外の行も併せて修める

きらう：区別して避ける。わけへだてする

たとえとしては仏様に申し訳ないのですが、列車や飛行機、船など、何々号と呼びますね。「号」とは名前。だから「仏号」とは仏様のお名前、つまりここではお名号みょうごう、「南無阿弥陀仏」のことです。「お名号を称えることを第一にしているんだけれども」、もつと極端に言うと「口ではお念佛ばかりを称えているんだけれども」、さらに辛辣しんらつな言い方をすれば「格好だけは念佛行者だけれども」というのが一行目ですね。

「現世を祈る」というのはさつきの、いわゆる「現世利益」、現世での幸福、幸せ、いいことを求めて祈ること。神仏にお願い、おねだりすることです。「おねだり」と言えば可愛らしいですが、やはり本来自分がやるべき努力を放棄しているところに問題があります。自分のことなのに神仏にさせておいて、自分は何もしない。「人まかせ」ならぬ「神仏まかせ」です。

専修と雑修

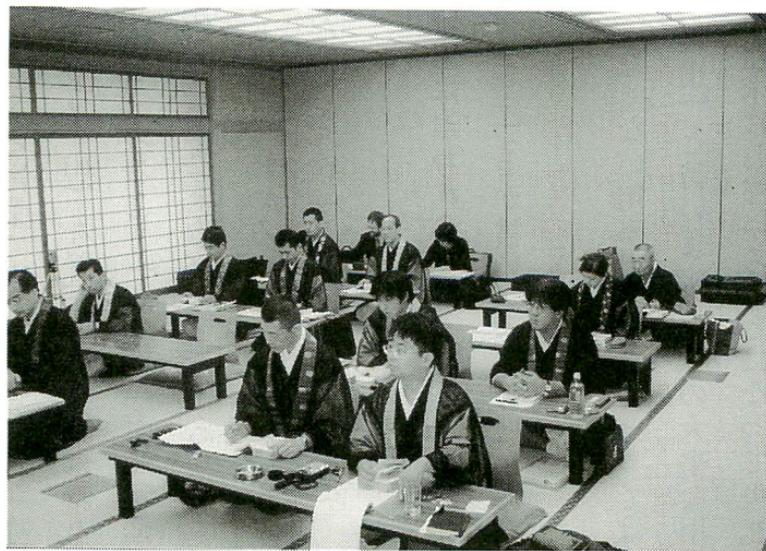
「雑修」は専修（もつぱら修める）に対する言葉です。「専修」は「専修念佛」とか、「専修寺」（浄土真宗高田派のご本山）など、この言葉は時々耳にされると思います。「もつぱらお念佛を修めること」です。「南無阿弥陀佛」を称えることで、まさに往生・成仏の結果に至る修行、行であります。これに対して、雑々と念佛以外の行も併せて修めるのを雑修といいます。もちろん、専修が大切で雑修は「雑」だから元々「どうでもいいもの」、不要なものなんです。

「雑用」という言葉があります。「雑用に追われまして、お返事が遅れました。」とか、「バタバタしております……」とか言い訳することがありますね。

話す相手には言つても通じない、言いたくない用事で、自分にとつてはやはり大事な用事のことを、たいてい「雑用」と言います。「私の大事な用事で、お返事が遅れました。」とは相手を粗末にしていることになつて失礼に

あたるので、「雑用」とか「バタバタ」とか言い訳をします。それでも、言われた者からすると「それでは私の用事は、あなたの雑用以下か。」と言いたい気もしますが、自分もそんなときがあると思い当たるので、「だれでもいろいろと人に言えない事情があるからなあ……。」と納得します。「雑用」は「私の大事な用事」を包むオブラーートですね。

雑修というのはこの「雑」と同じで、自分にとつては——実は、内心——大事な行であるわけで、頭では



大谷声明研修会

「雑」と思いながらどうしても離れられないものです。この離れられないところに問題があると言おうとしていることが、おわかりでしょう。

なお、「これも雑修……」とあるように、今日のお話はいくつかある雑修の中の一つです。

千中無一

「千中無一」は、千の中に一もない。同じことをしている人が千人いるとしたら、そのうちお淨土の報土に——ど真ん中ですね——往生できる者は一人もいない。

報土と化土については前にもお話ししたことがありますね（『みめぐみの』第五部参照）。

報土とはお淨土のど真ん中、阿弥陀様が凡夫の私たちを迎えようとしてお作りくださった、お淨土はお淨土でもそのど真ん中、阿弥陀様の願われる通

りの心をいただいた凡夫が生活できる場所です。

化土は、お淨土はお淨土でもその辺鄙へんびなところで、ど真ん中へ移る資格を
もらうにはまだまだ時間のかかる人の居るところ、仮の場所です。阿弥陀様
のお心をまだ十分に我が物にできない者の居る場所です。

なぜこうなるかというと、お淨土へ往生することは願っているものの、自
力（自分の計らい、自分の成仏する能力）を離れきれず、阿弥陀様のご本願
があまりに偉大すぎて信じきれず「本当かいな。」と疑つてゐるためです。

ひよつとしたら、格好だけ？

全体の意味がわかつたところで、もう一度このご和讃を味わつてみてください。
いかがですか。

このご和讃は、さつと読むとそのまま通り過ぎてしまうのですが、一度ひ
つかかると氣になつて仕方なくなります。先ほど「格好だけは……」と言い

ました。このご和讃をさつと読むと、「なーんだ、私は現世利益なんか求めていないよ。」となります。が、注意深く読むと、

「エツ、外見だけは念佛行者……。善男善女？」

「お念佛は称えていても、心ここにあらず……。

と、気になり出すと、考え込んでしまいます。

そう、はじめに「どんな気持ちでお念佛を称えておられますか。」と尋ねられたら、とお聞きしました。「〇〇がうまくいかないかなあ。」というようなことが、頭に浮かんで来ることはありませんか。他所の神仏のところへはお祈りに行かなくても、阿弥陀様に手を合わせてお念佛を称えているときに、「〇〇が××になってくれないかなあ。」などという思いが頭の中を駆け巡つていませんか。どこを向いて手を合わせているかの違いだけで、これは紛れもなく「現世を祈る」気持ちですね。

いわゆる現世利益の「祈る」は他所の神仏のところへ行つて祈ることに限

つた、形だけのことではありません。ですから先ほどのお話で、もし私を畠みかけようとなさった方があつたとしたら、もう一度ここでお考えいただくなればありますか。日ごろお念仏を称えている人が時々他所の神仏のところへ行つて現世の幸福をお祈りするということだけでなく、形は念仏行者でも心に何を思つているかによつて「現世を祈る行者」かどうかが決まるというのが、このご和讃です。当たり前といえば、当たり前なのですが……。

神仏のお力で何とかと、いや今のお話の場合は阿弥陀様のお力で何とかと、祈る気持ちですね、そういうことが本当にならないだろうかと、「今一度考えてみよ。」というのが、このご和讃のお心です。

そんなにいけないのか

そこで、開き直つて「心に現世の幸福を願うのは人情じやないか。何がそんなにいけないといふのか。」という疑問が出てくるので、それを考えてみ

ましょ。

まず第一に、現世を祈ることで怠けぐせがついてしまうことはすでに何度も述べましたね。

次に、何か願い事——どうしても実現したいこと——があるとしても、それは今の欲望であって、それがうまくいかなくて沈みこんでいても、よくよく考えてみると、ああそのほうがよかつたのかなあということもあります。要はその時その時の自分の都合で願い事をしている。今日何かをお願いしたけれども明日



光道台下に声明（往生礼讚）の指導を受ける門信徒

はそれと反対のことをお願いしているような、そんな不安定な、身勝手な心のあり方です。この身勝手さはさらに、物事が願い通りになつた後、時にはお願いしたこと自体をも忘れてしまつてはいる、というほどいい加減なこともしばしばです。

目の前の利益——これはもう利益（りえき）と言つたほうがぴつたりですが——そういうコロコロ変わるリエキを追い求めてはいるだけで、お祈りされているほうの神仏はたまつたものではありません（笑）。

このことは同時に、私の幸福をお祈りすることは誰かの不幸をお祈りしていることにつながることが多いということです。私の商売が繁盛すれば誰かが倒産するかもしれません。自分の努力で儲けるのは自由ですが、神仏をそこに引つ張り込むのはどうでしょうか。

そもそも仏法では、私たちを支配する神であるとか願い事をかなえる神であるとかは認めていません。そういう運命を支配する神はあり得ないという

のが仏法の立場で、そういう現世利益を求めるのは「お門違い」だということを、もう一度思い起こす必要があります。つまり、良いか悪いかではなく、お祈りをしても詮^{せん}のないことだということです。

もつと、もつと……

第三に、これは「いけない」というよりも、覚りを目標とする仏法の上からいうと本来の目的から遠ざかる、いや、逆方向を目指すことです。浄土真宗でいえば、現世を祈る気持ちを盛んにすることによって、目標とする信心から遠ざかることを意味するもので、このご和讃はその警告のためのご和讃です。

なぜそうなるかというと、現世の幸福を祈ることはそのまま欲望——つまり貪り^{むさぼ}の煩惱——を駆り立てることで、欲は新しい欲を呼び、「もつと、もつと……。」ということになります。浄土真宗では具わった煩惱を否定はし

ませんが、それをもつと盛んにせよということはどこにも教えられていません。

後世を祈る

以上のような理由から、淨土真宗では「祈る」という言葉はめったに使われません。その例外である故に忘れられないのが、えしんにこう惠信尼公（宗祖親鸞聖人の奥方）のお手紙です。それは惠信尼公がかくしんにこう覚信尼公（親鸞聖人の末娘・本願寺の基を築いた方）の疑問に答えながら、若かりし頃の父上のご苦労を伝えられたお手紙の中に見られます。

……山を出でて、六角堂に百日籠こもらせたまひて後世を祈らせたまひけるに、九十五日のあか月、聖徳太子の文を結びて、示現じげんにあづからせたまひて候ひければ、やがてそのあか月出でさせたまひて、後世のたすからんずる縁にあひまるらせんとたづねまゐらせて、法然上人にはあひまるら

せて、また六角堂に百日籠らせたまひて候ひけるやうに、また百か日、降るにも照るにも、いかなる大事にもまゐりてありしに、……

「……（親鸞聖人は）比叡山を下りて六角堂に百日お籠りになつて後世をお祈りになつたのですが、その九十五日目の明け方、聖徳太子が文を示してお姿を現わされました。ほどなく夜が明けて（親鸞聖人は）六角堂をお出になり、後世のたすかるであろうご縁にお逢いしようと法然上人をお尋ねになりましたときのよう、また百日の間、雨の降る日も晴れの日も、どんな他の一大事があつても、（法然上人の所に）お通いになつて、……（註・筆者訳）」

後世を祈らせたまふ（後生をお祈りになる）——自分の力（自力）ではお淨土へ往生することができないので、仏に祈る。現在の幸福を祈るんじゃなくて、「将来お淨土へ行きたいとお祈りになつた。」と。今までのお話で考え



惠信尼公

てきた現世での幸せを祈るのとは違います。浄土真宗で「祈る」のは後世（来世）のことです。

これは親鸞聖人が六角堂に籠られて、聖道門から浄土門に移られる（比叡山を降りて法然上人の吉水の草庵に入室）頃のことです。その後他力の信心、つまりご自身の往生成仏を確信されて、今度はご自身のほうからは後生を「祈る」必要がなくなり、喜びのご恩報謝のお念仏の生活に入られます。これが他力のお念仏なのですが、比叡山を降りられたころはまだ「後世を祈らせたまふ」——自力の念仏——お気持ちであつたと言えるでしょう。

現世の存在

ところで、私たちが現世を祈る心持ちは、商売繁盛や合格祈願など明確なものは別としても、家族や縁故者の日々の安全を願うなどもつとも素朴な願いも、やはり現世を祈ることだと言えます。厳格に考えれば考えるほど、わ

からなくなつてくるのが正直なところです。

やかましく述べてきた私が「今さら、何を言い出すのか。」とお叱りを受けることでしょう。

しかしこのことによつて私たちは、自分自身が所詮「現世の存在である」ことを痛感させられるのです。欲の深さは人によつて差があつても「現世を析る存在」として生まれてきたことに変わりはなく、今生活している場所がそのような環境の現世であることに、いやでも気づかされます。

そうであるからこそお念佛の教えが尊いのであつて、この世の枠を越えたところ、生死の苦しみを超えた——言い換えれば生と死を問題にしなくてもいい——ところに真の安住があるといただけるのです。

方 便

他人^{ひと}は外見しかわかりませんが、「どう見てもあの人は幸せばっかりの人

だ。」と思える人は確かにありますね。幸せを一身に引き受けているような人はおられますぐ、そういう人はひょつとすると不幸ということを一度も経験していないために、かえって本当の幸せは知らないかも知れませんね。ひがみですかね（笑）。このような人は、何かを祈ろうという気持ちも起こらないのかも知れません。もしそうだとすると、「祈りたい」気持ちが起ころも大切なことと思えてきます。

それは、「祈りたい」気持ちが起こるのは阿弥陀様の方便だといただけるからです。「方便」とは「教えに導く手立て」ということで、ここ――祈りたい気持ち――が教える入り口だとわかれば、ここで止まつていては駄目でそこから中に入ることによつてはじめて本物にたどりつけるということもわかるのです。こう考えると、祈る気持ちも起こらないような「幸せいっぽい」人は気の毒に見えてきますね。

仏様のはたらき

ひと口に現世利益といつても多種多様で、誰が見ても「なんと、欲の深い。」と思うようなお願いをする人はともかく、苦しみの絶えることのない重病に冒されたり、また窮地に立たされて文字通りわらをもつかむ思いをしている人に対して、「お祈りをしても意味がありませんよ。」などとは、とても言えるものではありません。

先ほど私は、仏教では運命支配をする神のような存在はあり得ないから認めないとしました。仏教では、「すべては因縁によつて生じている」と説き、「因縁」は仏教思想の核心を示す語で、因（直接原因）と縁（間接原因）が結合して万物が成立する、と考えます（『岩波仏教辞典』より要約）。

たとえば病気については、「体力が弱っている（因）ところに、ばい菌に

感染する（縁）」と考えます。私たちの「死」について見ると「生まれたこと（因）と病気（縁）による」ので、原因は「病気」ではなく、「生まれたこと（生）」であつて「生まれたときから死ぬ要因をはらんでいた」と見るのです。このことでわかるように、私たちの病気も仮の意思ではなく、また死も仮に「召される」ではありません。「因縁」はあくまで因縁で、それを支配する主はないのです。

それでは、「わらをもつかむ」思いの人に対して、仮様は何をしてくださるのでしょうか。

それは、私たちに向かって命令したりコントロールしたりされるのではなく、一緒に私たちの側にいて「共に苦しんでくださる、共に力を出してくださる」のです。このことが本当の意味で私たちに一番力になることです。物の支えではなく、心の支えだと言えましょう。

むすび

お念佛を称えることはもちろん大切なことです、「称えさえすればいい」というものではない」と、やがて気づくことがやはり大切です。そこで、称えているときの気持ちを探つてみることは、まことに容易な「自己診断」です。その意味から、今日のご和讃はまことに味わい深いものと、いつもいただいております。

感想
意見

富山県東砺波郡 匿名希望

たのしみに十六部読ませていただきました。善知識とあがめています、光道台下の、第四頁の思い出のお言葉身にしみ、御母上のやさしいお声が「お願のお念佛じやなしに、お礼のお念佛なのよ。」と聞こえる様に感じ、浄土真宗で良かつたです。本願の有り難さ、どんな修行も出来ない身です。お念佛の日々を過ごさせていただきます。

東京都町田市 諸戸 貞昭さん

信心は大変難しいと思つていましたが、本願力に気づく事によつて大きな安心感がある生活になつていけそうです。

富山県東砺波郡 河合 寛さん

不思議なご縁で、このような本を読む機会を得ました。他力とは仏力であり、本願力であるとのお話、わかり易く、一日三度の食事の前後のいただきます、ごちそうさまの言葉は、他の生命を頂戴してわが生命としている現実を素直に合掌礼拝することが肝要ですね。これからもどうかご指導下さい。南無阿弥陀仏

北海道小樽市 穴田 孝子さん

いつもありがたく読ませていただいております。暮らしさは便利であつても、人生のドラマのようなおまつりごとなどは昔なつかしくいつまでも心に残るもので

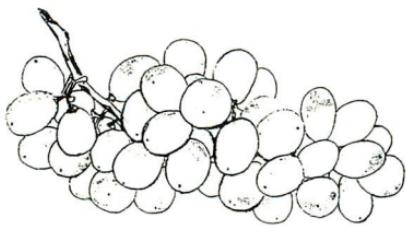
す。その反面、事故などおこつたときはただ祈るのみです。のりこえてみるとよく知つてる老人になります。ちょっとしたことで大きな事故にならないように台所、火の用心、戸締まりは欠かせません。その場をたとえ玄関でもはなれるときはガスのスイッチを止めるよう心がけたいものです。雨、風、雪から身を守るには人間仲良くということが気持ち的にもおちつくのです。これからもますますのご活躍を念じ上げます。

京都市 南 斎子さん

どんな者にもわかりやすく楽しく読ませていただいていますうちにどんどん仏法が心の底にまでしみこんでまいります。とてもしあわせな気分になりました。それはご立派な御台下様がいつも凡夫の立場にお立ち下さつてお説き下さつているからだと思います。「私説く人、お前聴く人」という様なお話をいつも聴いていますので、なかなかすなおになれなくています。 合掌

北海道亀田郡 鍋谷 千鶴子さん

鶯の坊やの鳴声が上手になつたと思つたら七月も末になつてきました。この度のお話は大変に良く心に沁みました。亡き義父の言葉通りのお話でございましたから。実弟の方に宛てた一番最後のハガキに「今は何も怖い事等ない、仏様が導いて下さるので安心してお念佛を唱えてるだけで幸せである。」と書いてました。



四

あとがき

みめぐみの刊行委員会

今回は「現世を祈る行者……」のご和讃を引き、極めて重要な真宗の要にふれて頂きました。浄土真宗の「現世利益」について頭では理解し、何故即物的な利益を願つてはいけないのかも何となく分かっているつもりでも、実際に現世にあって、困りごとに直面したときお願いしたくなるのが人情です。そんな時、どう考えたらよいか。また、そこで阿弥陀様はどうして下さるのかまで分かりやすく説いて下さいました。

また、今号は「読者の頁」にご感想を多く寄せて下さいました。この読者欄は著者である光道台下との対話の頁でもあります。寄せられるハガキを通して光道台下も御親教の「切り口」を考えても下さいます。今後もご感想に留まらず、積極的なご質問お待ちしておりますのでふるつてお寄せ下さい。

みめぐみの 第17部

2002年11月5日 印刷

定価 200円

2002年11月10日 発行

著 者 大 谷 光 道

発 行 みめぐみの刊行委員会

〒600 京都市下京区烏丸通七条上ル常葉町754
-8167 本願寺寺務所内

TEL. 075(351)3555 FAX. 075(351)3120
振替口座 01060-5-56990

印 刷 (株) 中 外 日 報 社



みめじみの刊行委員会刊